KODANSHA NOVELS

黒猫館の殺人

一九九二年四月一〇日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者—綾辻行人 © 1992 YUKITO AYATSUJI Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二-一二-二一 郵便番号一一二-〇一 編集部〇三-五三九五-三五〇六 販売部〇三-五三九五-三六二六 製作部〇三-五三九五-三六一五

印刷所—豊国印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181615-2 (文三)

KODANSHA NOVELS

KODANSHA NOVELS

黒猫館の殺人

辻行人

講談社ノベルス
ODANSHA NOVELS

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

——鈴木文武君に　五年前の岩倉を思い出しながら——

目次

プロローグ――9
第一章　鮎田冬馬の手記　その1――14
第二章　一九九〇年六月　東京――38
第三章　鮎田冬馬の手記　その2――54
第四章　一九九〇年六月　東京～横浜――79
第五章　鮎田冬馬の手記　その3――100
第六章　一九九〇年七月　札幌～釧路――148
第七章　鮎田冬馬の手記　その4――183
第八章　一九九〇年七月　阿寒――200
エピローグ――259
あとがき――270

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎

○主な登場人物

鮎田冬馬……「黒猫館」の管理人（60）
風間裕己……「黒猫館」の現在の持ち主の息子　M＊＊大学の学生
　ロック・バンド「セイレーン」のギタリスト（22）
氷川隼人……その従兄　T＊＊大学の大学院生「セイレーン」のピアニスト（23）
木之内晋……裕己の友人「セイレーン」のドラマー（22）
麻生謙二郎……同「セイレーン」のベーシスト（21）
椿本レナ……旅行者（25）

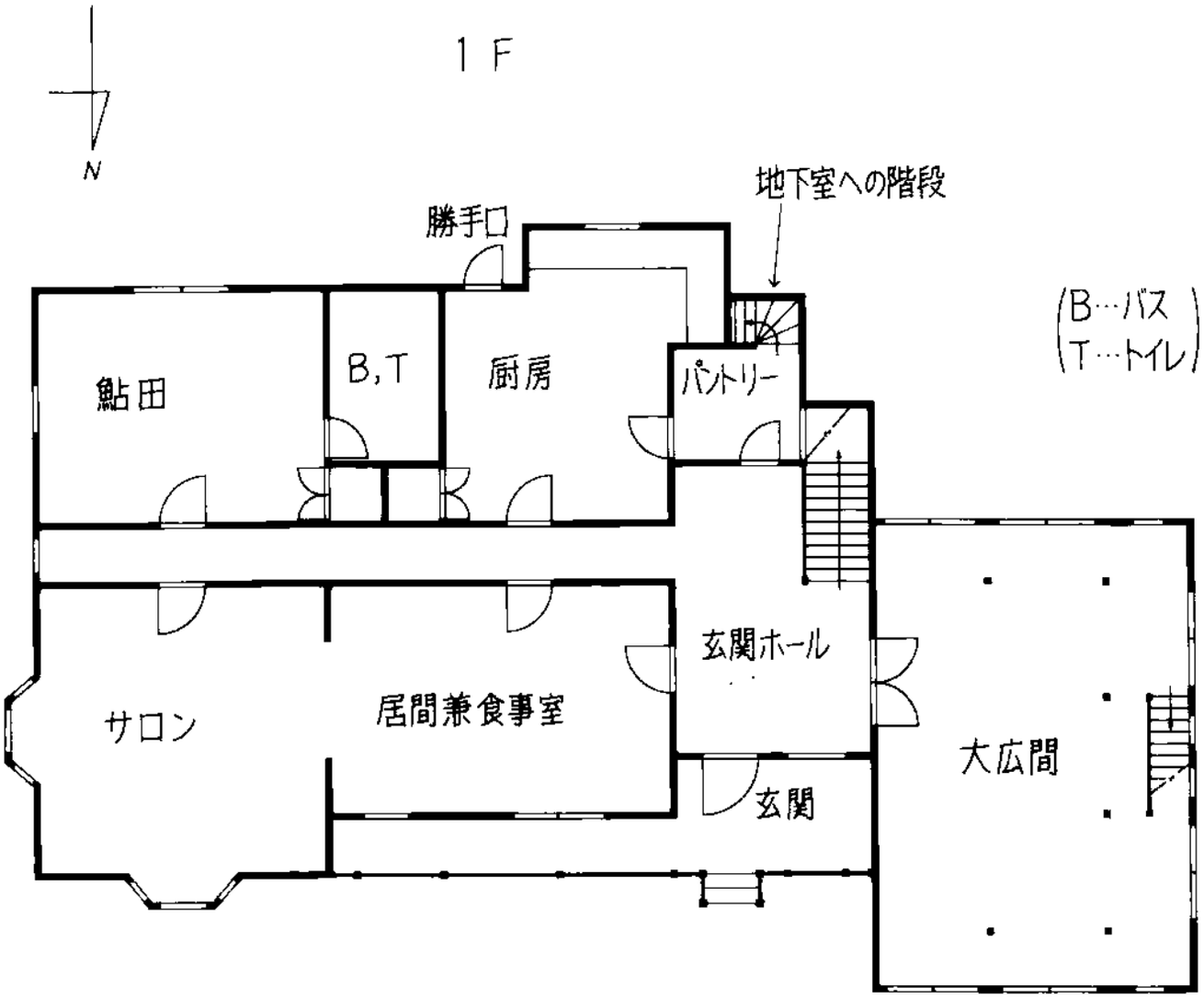
［（　）内の数字は一九八九年八月時点の満年齢］

天羽辰也……「黒猫館」の元の持ち主　元H＊＊大学助教授　生死不明
　理沙子……その娘　生死不明
神代舜之介……天羽の友人　元T＊＊大学教授（70）
橘てる子……天羽の元同僚　H＊＊大学教授（63）
江南孝明……稀譚社の編集者（25）
鹿谷門実……推理作家（41）

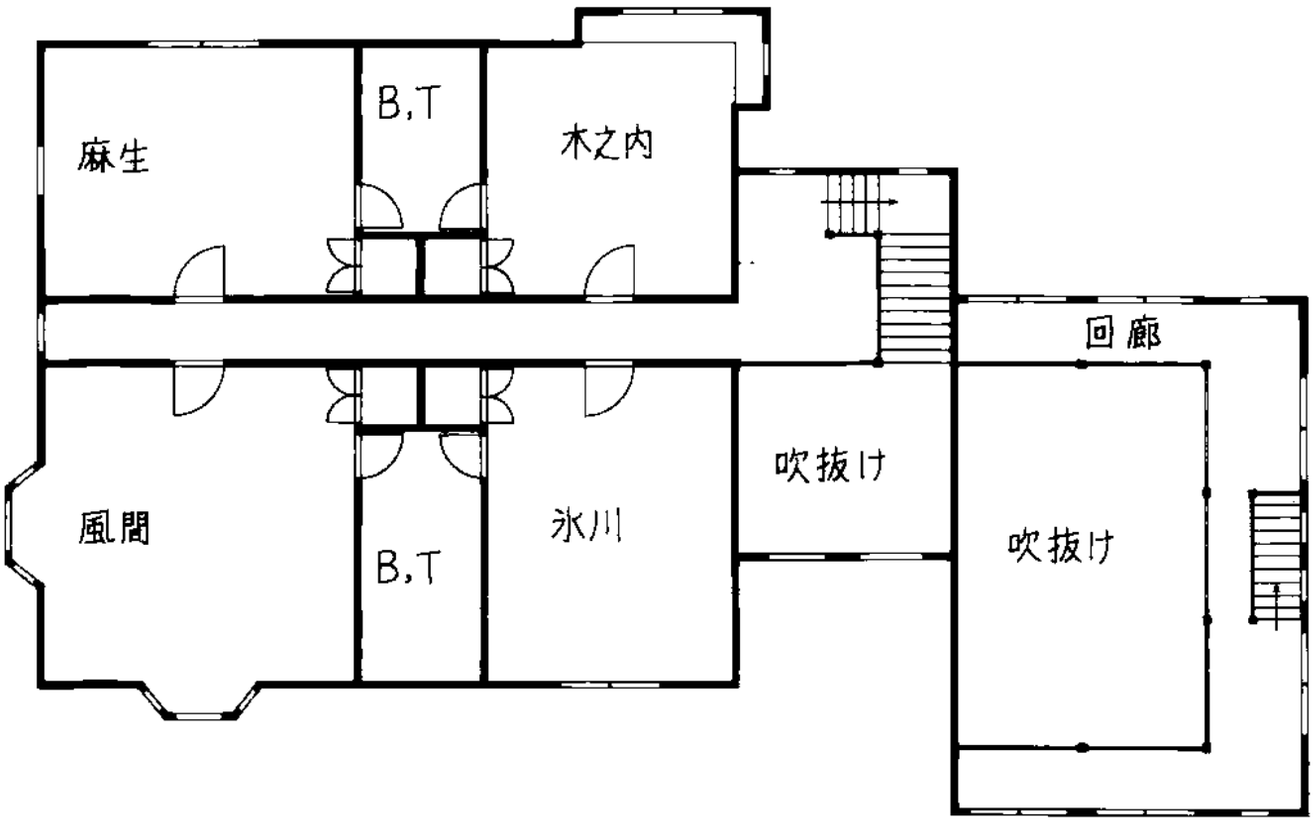
［（　）内の数字は一九九〇年六月時点の満年齢］

黒猫館平面図

1F


N
勝手口
地下室への階段
(B…バス
T…トイレ)
鮎田
B,T
厨房
パントリー
サロン
居間兼食事室
玄関ホール
玄関
大広間

2F


麻生
B,T
木之内
回廊
風間
B,T
氷川
吹抜け
吹抜け

プロローグ

――一九九〇年七月八日（日）

北海道・阿寒――

三人が門の前に立った時、まるでその瞬間を待ち構えてでもいたかのように、背後に広がる蝦夷松の森から濃い霧が流れ出してきた。思わずシャツの半袖から出た腕をさすりながら、江南孝明は後ろを振り返った。

数メートル先、森の狭間を縫う細い林道を半ば塞ぐような格好で、三人が乗ってきた車が停まっている。そのグレーの車体が、早くも霧の白さに溶け込もうとしていた。

「凄い霧だなあ」

江南よりも何歩か前方で立ち止まり、浅緑のブルゾンを着た背の高い男が呟いた。

「いやはや。何だか、釧路から霧に追っかけてこられたような気分だねえ」

推理作家の鹿谷門実である。相変わらず痩せぎすで、やたらと身体が細長く見える。緩いウェーヴのかかった柔らかそうな髪を撫でながら、掛けていた黒いサングラスを外し、傍らに立つもう一人の男の顔を窺った。

「どうです、鮎田さん。何か思い出せそうですか」

「さあ」

と首を傾げ、男は眼前の門を見上げた。しばらくもごもごと口ごもったあと、心許なげな声で、

「何となく、そうですな、見憶えがあるような気はするのですが」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

彼の名は鮎田冬馬という。貧弱な痩せた身体つきに加え、背中がいくぶん曲がっているため、必要以上に老けて見える。年齢はまだ六十そこそこらしいが、風貌はもはや老人のそれだった。禿げ上がった頭に茶色い鍔なしの帽子を被り、左の目には白い眼帯を付けている。眼帯の周りから頬、顎にかけて、顔の左半分に残った火傷の跡が痛々しい。

老人の視線を追って、江南は門を見た。

高い門だった。暗褐色の石の門柱が、地面を覆った雑草の間から年老いた大木の幹のように生えている。表札は出ていなかった。かつて表札を出していた形跡もない。門扉は古びたブロンズ製の格子扉。門の両側には同じブロンズの柵が連なり、周囲の森と庭とを仕切っている。

霧が音もなく、門扉の格子の間から中へ流れ込んでいく。先程車を降りた時には門の向こうにちらちらと見え隠れしていた建物の影が、今はもうすっかり白い帳に隠されてしまっていた。

門扉の合わせ目には黒い鉄の鎖が巻きつけられ、頑丈そうな錠前で留められている。鹿谷が前へ進み出、格子を両手で摑んだ。揺すってみるが、びくともしない。

「鹿谷さん、そっちに」

と、江南が扉の左端を指さした。

「ほら。通用口が」

「ん？　やあ、ほんとだ」

門の端に設けられたその通用口の方は、内側から単純な差込錠が掛かっているだけで、これは格子の隙間から手を入れて容易に外すことができた。幸いにも、と云うべきだろう。鹿谷と江南の二人だけならば門を乗り越えるなり何なりするのだが、同行の鮎田老人に同じ真似ができるとはとても思えなかったからである。

「入ろう、江南君」

扉を開くと、鹿谷は二人を振り返った。
「鮎田さんも、さあ」
ブルゾンと同色のショルダー・バッグを肩に掛けた鹿谷が、先頭に立って狭い通用口を抜ける。そのあとを鮎田冬馬が、右手に握った茶色い杖で身体を支えながら続いた。最後に江南が入る。
立ち込める白い霧の中を、三人は足を忍ばせるようにして進んだ。森で遊ぶ野鳥の声が四方八方から響いてくる。七月初めの、そろそろ正午を過ぎようかという時刻なのに、気温は一向に上がらない。肌寒さにまた腕をさすりながら、江南はサマー・セーターを車の中に置いてきてしまったことをいたく後悔した。
霧で視界が遮られて判然とはしないが、屋敷の前庭の広さはかなりのものらしかった。濃い緑の葉を茂らせた庭木の影がそこかしこに見える。一メートル足らずから三、四メートルのものまで、高さや大きさはまちまちだった。
「見てごらんよ、江南君」
鹿谷が庭木の一つに近寄り、葉の間を覗き込みながら云った。
「こいつは柾だね。久しく手入れをしていないみたいだけど、よく見るとほら、奥の方に剪定の跡が残っている」
「剪定？」
「以前は定期的に枝を落として、ちゃんと形を整えていたってことさ。その証拠だ。はて、この木は何の形をしていたんだろうねえ」
「ああ」と呟いて、江南はその木を睨みつけた。
屋敷の前庭に植え込まれた木々はかつてさまざまな動物の形に似せて刈り込まれていた、という「手記」の記述を思い出す。じっと見つめていると、緩い風になびく霧の動きに幻惑されてだろうか、ふとその黒い影が巨大な猫の形に見えた。それはもちろ

ん、「黒猫館」なる館の名称がその時の江南の心理に働きかけた結果でもあった。

尖った顎を鹿爪らしく撫で、鹿谷は足下を埋めた雑草を踏みつけて身体の向きを変える。その横で鮎田老人が、しきりに首を捻りながら周囲を見渡していた。少なくとも昨年の九月までは、彼が屋敷の管理人を務めていたはずなのだ。なくしてしまったその時の記憶をどうにかして取り戻そうと、今も懸命なのだろうが……。

霧のせいで当たり前な感覚が失われているのかもしれない。荒れ果てた前庭を横切る煉瓦敷の小道を進み、建物の前に行き着くまでに、江南は何百メートルもの距離を歩いたような気がした。

「やっと辿り着いたねえ」

鹿谷が感慨深げに云った。

「ふうん。これが黒猫館か」

薄灰色に汚れた壁に、縦長の小さな窓が並んでいる。屋根は急勾配の切妻屋根。見た感じ、さして奇異でも風変わりでもない二階建ての洋館だけれど、北海道の人里離れた森の中にこんな家が建っていること自体、妙な話ではある。あまつさえ、これが二十年前あの中村青司によって設計されたものなのかと思うと、そしてまた、昨年の夏あの「手記」に記されていたような事件が起こった場所なのかと思うと、江南はやはり慄然とせざるをえないのだった。

「例の〝風見猫〟とやらはどこかなあ」

ひょろ長い身体を伸び上がらせて、鹿谷が屋根を振り仰ぐ。江南も倣って屋根を見上げたが、目当てのものは見当たらない。

「あそこですよ」

と、鮎田老人が杖を持った腕を挙げた。

「あっちの端っこに、見えませんか」

云われて目を転ずる。向かって右側の端――その部分だけ寄棟造りになった屋根のてっぺんに、なる

ほどそれらしき薄灰色の影が見えた。風見鶏の「鶏」の代わりに別の動物が取り付けられた、奇妙な代物である。霧に阻(はば)まれてぼんやりとしか見えないが、確かに鶏とは違う形をしている。

「あれか……」

屋根を見上げたまま、鹿谷は少しの間腕組みをして動こうとしなかった。やがて、小首を傾(かし)げながら低く何事か呟いたかと思うと、鮎田老人の方に向き直って「さて」と云った。

「中に入ってみましょうか」

「鍵が掛かってるんじゃないですか」

江南が懸念を示すと、鹿谷はちょっと肩をすくめて、

「だったらどうにかするさ。せっかくここまで来たんだ。諦(あきら)めて帰る手はないだろう」

「そりゃあ、まあそうですけど」

強い風がひとしきり、庭に点在する木々を大きくざわめかせて吹き過ぎた。辺りを押し包んでいた霧が散り、ほんの短い間ではあるが、南中した太陽の光線が地に射した。

「さあ、行こうじゃないか」

高らかに云って、鹿谷は束の間の陽射しに照らされた館の玄関に向かって足を踏み出した。からからと小さな音を立てて向きを変える屋根の上の影にもう一度ちらりと目をくれてから、江南は鮎田老人とともにそのあとを追った。

第一章　鮎田冬馬の手記　その1

これは私自身の為の手記である。

このノートの文章を自分以外の人間に読ませようというつもりは、今のところ私には全く無い。余程特殊な事態にでもならない限り、恐らくは今後もずっとそうだろう。

＊

ここに記すのは、今から一ヵ月前――一九八九年の八月一日から四日にかけて「黒猫館」と呼ばれるこの家に於て起こった事件の、正確且つ詳細な記録である。

この手記を起こすに当たってまず、記述者である私こと鮎田冬馬は、そこに如何なる虚偽の記述をも差し挟まない事を、他ならぬ私自身に対して誓っておくとしよう。私が屋敷の管理人としてこの目で見、この耳で聞いた事実を有りのままに書き記す事こそが、この記録の第一の目的なのである。従って、例えばそこに自分の想像や推測を付け加える場合には、それらが私の個人的な先入観や願望の産物とはならぬよう細心の注意を払わねばなるまいと考える。とにかく出来る限りの冷静さと客観性を以て、私はあの事件の顚末を書き記しておこうと思うのである。

繰り返すが、これは私自身の為の手記である。この手記を書く事によって、私はあの忌まわしい事件

を一つの〝過去〟としてこのノートの中に封じ込めてしまいたいのだ……。

年を取り、最近目立って記憶力が衰えて来た事を実感する。後十年も経てば、今はまだ生々しいあの事件の記憶もすっかり薄れてしまっている事だろう。十年後の私にとって、きっとこの手記はさぞや面白い読み物となってくれるに違いない。そういった意味で、これは未来の私自身の為に書かれる〝小説〟（それも所謂探偵小説の部類に入る物）なのだとも云えるだろうか。――そう。ここはいっそ、そのような気持ちで筆を進めて行くとしよう。

＊

さて、何処から始めるべきか。

やはりこの場合、順を追って記して行くのが良いと思う。一ヵ月前の自分自身の記憶を細部に亘って掘り返して行く為にも、それが一番の良策であろう。

まずは、彼らがこの屋敷にやって来た、その前後の事情から……。

1

私がその連絡を受けたのは、一九八九年の七月上旬の事であった。確か七月に入ったばかりの頃、二日か三日か、その辺りだったかと思う。

現在この屋敷は、埼玉県に住む某不動産会社の社長なる人物が「別荘」という名目で所有しているのだが、実質的な土地・家屋の管理は当地での代理人である足立秀秋氏に一任されている。その足立氏から、電話で連絡が入ったのだった。

来月の初め、現オーナー氏の息子が夏休みの旅行でこちらへ来る事になった。友人達と一緒にあちこ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com